故郷第八場面　読んだ読んだ

三年二組　氏名

母とホンルとは寝入った。
わたしも横になって、船の底に水のぶつかる音を聞きながら、今、自分は自分の道を歩いているとわかった。……もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。

主人公は故郷を離れる船の中で横になりながら、今、自分は自分の道を歩いていると分かった。「私」とルントウは隔絶したが、ホンルとシュイションは今でも心が通い合っている。だからこそ、「私」もルントウも他の人たちも経験しなかった新しい生活をしてほしいと願っている。しかし、それは、ルントウが香炉と燭台を所望したのと同じで、ただの偶像に過ぎない。

まどろみかけた「私」の目に、海辺の広い砂地が浮かんでくる。その上の紺碧の空には、金色の丸い月がかかっている。これが希望なのだ。希望とは、あるものとも言えぬし、ないものとも言えない。もともと地上に道がないのと似ている。歩く人が多くなればそれが道になるように、同じ希望をもつ多くの人の努力によって、希望が叶うのだ。作者は、このことが言いたいのだ。

くん

主人公は、船に揺られながら、ホンルとシュイションの心が通じ合っているところに、押しつけるような、自らや他の人の生活を全面否定するような形で希望を見出した。その希望に対して主人公は、かなえたいという思いはあれど、かなえるために行動を起こすこともなく、所詮、それは偶像に過ぎなかった。しかしその偶像にすがる姿は、ルントウと同じだと気付いた主人公は、「自分はルントウよりも…」とまたルントウを下に見た。

主人公は、希望とは道で、その道は歩く人が多くなることで作られるものと考えた。その一文に、作者の、未来のために行動を起こそうとするメッセージが感じ取れるが、最後まで主人公は今までの生き方を変えることはなかった。

この物語では、作者の、中国に対する愛情に近いものが感じられる。中国が好きだからこうしたい、中国をよくしたいから団結した行動を取りたい、そんな作者の強い思いに共感し、惹かれた人たちが、その後革命を起こす運動に参加しようとしたことだろう。

さん

主人公は、ホンルとシュイションを昔の自分とルントウとで重ねてみて、自分たちのように無駄の積み重ねで魂をすり減らす生活をすることを願わないと思っている。主人公は彼らに自分たちが経験しなかった生活をしてほしいという希望が浮かんだ。しかしそれは偶像に過ぎなかった。作者はこのことから、希望を叶えたいのなら、ただ願うだけじゃなく、希望を叶えるためにどんなことをすれば良いのかを具体的に考える必要があると伝えようとしている。

さん

主人公はホンルとシュイションに新たな希望をもった。自分のような無駄の積み重ねの生活、ルントウのような麻痺する生活、他の人のように野放図に走る生活ではなく、想像できないような新しい生活を託した。

まどろみかけた主人公は気がついた。これまで希望を抱くだけで努力はしてこなかった。そんな希望は偶像に過ぎない物だと。

主人公の心の変化と共に、魯迅は、生活水準の低かった当時の中国の国民に、努力しないと希望は叶わない、一緒に歩き出さないか？と呼びかけている。

さん